人吉・球磨　HITOYOSHI & KUMA

いつでも植林 森よ育て

コムラ苗樹（相良村）

苗木コンテナ栽培の先駆者

森林を育てるには1本の苗木から―。相良村柳瀬の「コムラ苗樹」は、県内で先駆的にスギやヒノキの苗木栽培にコンテナ（専用容器）を導入。年間を通して出荷を可能にし、継続的な山林経営につなげている。

スギやヒノキの苗木の通年出荷に取り組むコムラ苗樹の小村哲典代表（前列右から2人目）と従業員ら

平日、農園の一角で従業員らが黙々と作業に励んでいた。コップほどの容量のコンテナに一本ずつ植えて育てられた苗木を手に、大きさが出荷規格を満たしているか計測。作業を見守る小村哲典代表（40）は「今季もよく育っている」と満足そう。苗木はトラックで県内各地の山林へ届ける。

哲典さんによると、従来の露地栽培では、畑から掘り出して出荷できる時期は苗木が冬眠する12～4月に限られていた。

コンテナ栽培の導入により、苗木は土に植わった状態でいつでも出荷でき、植林の際も根付きやすい。山主は伐採から間を置かず次の植林ができるという。

コムラ苗樹は1918年創業。4代目の哲典さんは東京の大学を卒業し、商社などに勤めた。家業を継ぐつもりはなかったが、「自分しかいない」と決意し、30歳で帰郷して苗木作りを学び、父の跡を継いだ。

現在、県内のシェア5割を占める年約120万本の苗木を生産し、その半数がコンテナ栽培だ。期間雇用を含む従業員は23人。哲典さんの親戚で、苗畑を管理する小村寿徳さん（63）は「毎朝、成長を確かめるのが楽しみ。良い苗を山に送り出したい」と話す。

哲典さんは「都会から帰ってくる若者の受け皿に」と、2015年に森林整備の会社を設立し、Uターンや転職組を中心に12人を雇用。県南地域で植林や間伐の仕事を請け負っている。

学生の頃「光の当たらない所を照らしたい」と新聞記者を志した時期もあった哲典さん。今、人々の生活や自然環境を守る森林の未来を照らした取り組みは、しっかり根を広げている。（中村勝洋）

スギの苗木の大きさを確認し、出荷できるものを選別するコムラ苗樹の従業員たち＝相良村（石本智）